

【総説】

子ども理解に保育者の幼少期の経験が及ぼす影響に関する一考察 —保育場面の読み取りと幼児の心情理解の分析から—

小川 房子 (武蔵野大学教育学部准教授)

石田 由紀子 (武蔵野大学しあわせ研究所客員研究員)

兼間 和美 (武蔵野大学しあわせ研究所客員研究員)

要約

本研究は、保育場面の読み取りや幼児の心情理解に見られる「多様性」の要因に焦点を当て、保育者の幼少期の経験が影響を及ぼしているという仮説を検証するために取り組んだ。また、複数の保育者の異なる視点が幼児教育・保育の多様性と捉えるのではなく、その多様な読み取りを尊重し合い、学び合うことにより個々の保育者が多視点で子ども理解を図ることを幼児教育・保育における理想的な「多様性」と捉え、それが幼児教育・保育の場で乳幼児の情緒を安定させ、その子らしさを発揮し生き生きと生活するという「しあわせのカタチ」実現につながるものと考えて、子ども理解に保育者の幼少期の経験が及ぼす影響について質問紙調査及び保育者へのインタビュー調査を実施し関連性を考察した。

1. はじめに

世界保健機構 (WHO) の憲章に用いられたウェルビーイング (Well-being) は「健康とは、単に疾病や病弱な状態ではないということではなく、身体的、精神的、社会的に完全に良好ですべてが満たされた状態である」という広義の健康の定義づけの中の「満たされた状態」を意味する。つまり、感情としての幸せを表すハピネス (Happiness) よりも包括的な「しあわせ」を意味すると捉えることができる。また、幼児教育・保育をフィールドとする本研究において、「身体的、精神的、社会的に完全に良好で、すべてが満たされた状態である」を捉え直すとするならば、「主体的な活動を通して心と体を共鳴させるための安定した情緒、友達や保育者との豊かな関わり、安心安全な居場所を得ている状態」と表現できるのではないだろうか。本研究では、「しあわせ」をウェルビーイング (Well-being) として捉え、用いることとする。

2. 研究の目的

(1) 幼児教育・保育の重要性と保育者の存在について

OECD が 2030 年に向けて身につけることが望まれるコンピテンシーを検討するなど、非認知的能力を育てることの重要性と幼児教育・保育への新たな期待が高まっている。ジェームズ・J・ヘックマンは『幼児教育の経済学』において、ペリー就学前プロジェクトやアベセダリアンプロジェクトの追跡調査の結果を根拠として「幼少期の環境をゆたかにすることが認知的スキルと非認知的スキルの両方に影響を与え、学業や働きぶりや社会的行動に肯定的な結果をもたらす¹」と述べている。IQに関しては幼少期に身につけたことが持続しないものの、非認知能力を含むそれ以外の能力については持続することも明らかにしている。このことは幼少期にこころの知能指数である EQ を向上させる重要性を示唆するものであり、その後の人生に大きなプラスの影響を及ぼすということである。これは、すでに述べたウェルビーイング (Well-being) につながる。

では、非認知的能力はどのように育成されるのだろうか。非認知的能力の育ちにはアタッチメントが大きな影響を及ぼすことがこれまでの研究で明らかになっている。そのため、幼児教育・保育の場で乳幼児にとって「安全な避難所」であり「安心の基地」である保育者がその場面やその子を理解する際に、保育者の幼少期の経験が及ぼす影響を追究し、保育者が乳幼児を捉える多様な視点をもつことに寄与したい。また、レイチェル・カーソンは、代表作『センス・オブ・ワンダー』の中で、「子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感激に満ちあふれています。残念なことに、私たちの多くは大人になる前に澄みきった洞察力や美しいもの、畏敬すべきものへの直観力をにぶらせ、ある時は、まったく失ってしまう²」「持って生まれた子どものその感性をいつも新鮮に保ち続けるためには、世界の喜び、感激、神秘などを子どもと一緒に再発見し、感動を分かち合ってくれる大人が、少なくともひとり、そばにいる必要がある³」と述べている。乳幼児の非認知的能力の育ちを支えるには、センス・オブ・ワンダー (神秘さや不思議さに目を見はる感性) を持ち続けた保育者の受容的な関わりが不可欠と言えよう。そして、共感できる保育者がいることが乳幼児にとって「しあわせのカタチ」の基盤になると考える。

(2) 幼児教育・保育における理解とその多様性

保育のある場面を切り取って、その時の子どもの行動や表情・しぐさなどを手掛かりとし、子ども理解の方法や技術、子どもを理解する力の向上を目的とした研究は多く、すでに成果が積み上げられている。しかし、その場면을捉える際に保育者の幼少期の経験が及ぼす影響に焦点を当てた研究は希少である。事実、保育場面やその子の心情の読み取りは答えが一つとは限らない。さらには、それが保育の奥の深さであり、個々の捉え方の違いが幼児教育・保育における多様性であることはすでに語られ、定説となっているとも言える。しかし、複数の答えが存在する要因は明確になっていない。そのため、幼児教育・保育の現場では、その個々の捉え方の相互理解を図ることを目的のひとつとして、保育カンファレンスなどを行っているが、保育が複雑で難しいと捉えることや複雑に見えるその状況が保育における人間関係の難しさとして挙げられ、離職の理由となることも現実としてある。中坪史典らは『質的アプローチが拓く「協働型」園内研修をデザインする 保育者が育ちあうツールとしての KJ 法と TEM』の中で、園内研修で保育者が感じるプレッシャーとして①同調プレッシャー②評価プレッシャー③経験年数プレッシャー④完成度プレッシャー⁴の4項目を挙げている。これらのプレッシャーは、他者の意見に同調すべきかどうかという迷い、自分の意見がどのように評価されるのかという不安、経験年数に見合った豊富な知識を有した存在であることを披露しなければならないという責任、他の保育者に的確に伝えなければならないという困惑、などから生まれるものである。経験年数や他者の存在にかかわらず自分らしく考えを伝えられる環境が整っていない状況は、多様性を軽視した結果として生み出されるものではないだろうか。

マシュー・サイドは『多様性の科学』において、多様性の力、もしくはそれを軽視する危険性を指摘し、「組織や社会の今後の繁栄は、個人個人の違いを活かせるかどうかにかかっている。賢明なリーダー、政策、建築デザイン、科学的探究などによって多様性をうまく活用できれば、組織にも社会にも大きな恩恵をもたらされる⁵」と述べている。保育者が個々に異なる子ども理解や場面の捉え方をすることが保育の多様性ではなく、個々が多視点で子ども理解や場面の捉え方をすること、また、保育者集団を一つの組織としてみたときには、異なる視点から子どもを理解し、場面の読み取りをすることが幼児教育・保育の多様性と

捉えるべきではないだろうか。その際、本研究で仮説とする、幼少期の経験がそれらに及ぼす影響があるとすれば、保育者個々の幼少期の経験も踏まえて相互理解を図ることは必要不可欠と考える。保育の場面や子どもの心情をどのように捉えたかを様々なプレッシャーの中で語る前に、他者に批判されるものではない自分自身の幼少期の経験、その経験から生まれた心情を他の保育者に分かりやすく伝えることから始まる同僚性もあるのではないだろうか。さらには、一人一人の保育者がキャリアを重ね、多視点での場面の読み取りや子ども理解が可能になることと、それを的確に伝えられるようになることは、保育者の成長の側面から考えても、保育者集団としての組織の側面から考えても、大いに意味のあることと言えよう。

(3) 幼児教育・保育の現場における心理的安全性の構築について

保育者が捉える自己の専門的成長につながる園内研修の特徴を中坪史典らは『質的アプローチが拓く「協働型」園内研修をデザインする 保育者が育ちあうツールとしての KJ 法と TEM』において、保育者を対象に自由記述調査を行った結果から①議論の流れが良くてやりとり相互性がある②話し合いや発言の質が高い③雰囲気や関係性が良くて協議する対象に理解がある④保育の振り返りや構想がある、の4項目を提示している。その中のひとつ、子どもについて話し合うとき、全員で理解しようとする、公開保育をした保育者と話し合うときその保育者を批判するのではなく、共感しようとする同僚の状態を意味する「雰囲気や関係性が良くて協議する対象に理解がある⁶⁾」に特に着目したい。幼児教育・保育の質向上、保育者の資質向上を考えれば、保育者個々の専門的成長のみならず、組織としての成熟は欠かせないものである。そのためには日常の保育の中で直面する課題や解決すべき問題を共有し、向き合い、雰囲気や関係性が良くて協議する対象に理解ある組織へと成熟する必要がある。また、保育者一人一人が気兼ねなく意見を述べることができ、自分らしくいられる文化を意味する心理的安全性⁷⁾を築き、対人関係の不安は最小限であり、保育者集団としての成果を最大限に発揮できる組織となる必要があるのではないだろうか。

心理的安全性の構築のためには、保育者一人一人の子ども観・保育観を協働する者同士が相互理解を図る必要がある。本研究で仮説としている子ども理解に

保育者の幼少期の経験が影響を及ぼすという観点からも保育者一人一人の子ども観・保育観への相互理解を図ることが欠かせない。幼児教育・保育において保育者が多視点で乳幼児理解を図り、受け入れ、乳幼児が生き生きと自己を発揮できる環境の基盤づくりに寄与する研究を蓄積することが本研究の目的の一つである。乳幼児のよりどころとなる保育者自身が生き生きと自己を発揮して保育者の職務を全うするために現場に還元できる研究をし、幼児教育・保育の質を向上させることが乳幼児のしあわせをカタチにすることであり、本研究の意義であると考えている。

（４）研究の課題

保育場面の読み取りとその場面で見られる幼児の心情を理解する内容を分析し、子ども理解に保育者の幼少期の経験が及ぼす影響を明らかにする。

3. 本研究で用いる保育場面の選定について

（１）保育場面選定の方法

本研究の課題を明らかにするために取り上げる保育場面は、コロナ禍での研究活動であることを考慮するとともに、同じ環境や状況、同じ情報量で読み取ることが目的として、教材として市販されている映像を候補とし選定することとした。共同研究者3名が保育の数場面を視聴し、その場面の読み取りと幼児の心情をテキスト化しテキストマイニングの一種である、計量テキスト分析（KH Coder）によって、キーワードを抽出し、選定する。

（２）保育場面の選定結果

数場面を視聴した結果、保育者と幼児が心を通わせながら過ごしている場面や幼児の情緒が安定していると見て取れる場面では各共同研究者の言語記録には共通点が多く見られた。一方で幼児が課題に直面している場面では、担任保育者との関係性に焦点を当てる、対象児が抱える不安に焦点を当てる、情緒の安定に焦点を当てる、など抽出されるキーワードに幅がみられた。そのため、調査協力者の保育場面の読み取りや心情理解との関係性を考察するために、幼児が課題に直面する場面を選定することとした。

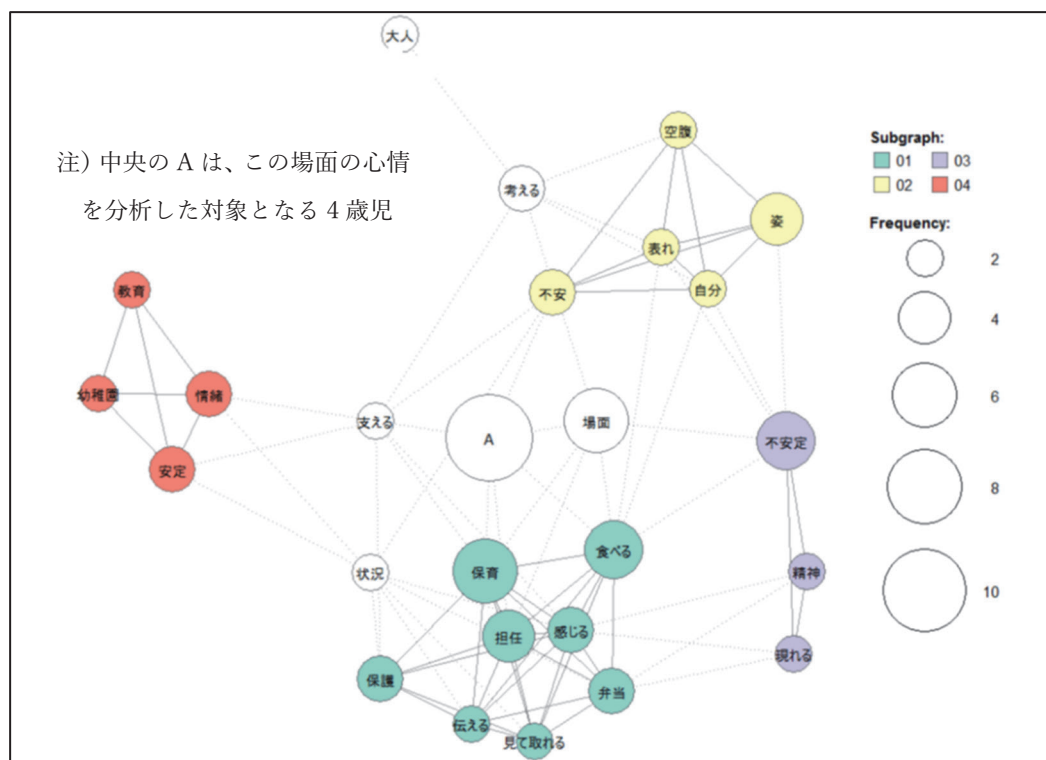


図 1 計量テキスト分析 (KH Coder) によって抽出されたキーワード

(3) 本研究で取り上げる保育場面の概要

2 学期開始直後の 4 歳児クラス。対象児は、3 年保育で入園した男児（以後、対象児と表記）。4 歳児クラスに進級し、1 学期は保育者や 3 歳児クラスから関わっていた特定の男児との関わりを中心に過ごしていた。2 学期に入り、担任保育者は友達との関わりを広げてもらいたいと考え、対象児とは 1 学期よりも距離を置いている。そのため、対象児は一人で過ごす時間が増えることとなった。そのような個別指導計画が背景にある夏休み明けの一場面である。

登園時に母親から「お弁当を食べない」と言っていることが担任保育者に伝えられていた。対象児は数日間、昼食を食べずにいる。この日も昼食の時間にお弁当を広げることも、出すことさえもせず、対象児は座っている。時には他児が食べ物を口に運ぶのを目で追う姿が見られる。

4. 倫理的配慮

日本保育学会倫理綱領に則り、調査協力園の園長に研究の趣旨を伝え、研究協力の承諾を得た。その上で調査協力者へ文書で調査趣旨を説明するとともに口

頭にて補足説明を行った。個人情報保護を遵守し実施することを伝え、調査協力の同意を得た。本研究における調査協力園と調査協力者はすべて仮名で記載し、人権に配慮した。また、研究に用いた市販の映像についても、研究での使用許可を得て使用し、映像に登場する園や対象児についても仮名とした。

5. 研究方法

(1) 質問紙調査

選定した保育場面の映像を調査協力者が視聴した後、その場面や対象児の心情を読み取り、質問紙調査を行った。1) 回答の場面や心情の読み取り内容を一覧化し考察する。また、2) 幼少期の経験との関連性を考察する。調査協力者は27名。保育歴の内訳は表1の通りである。

<質問紙調査の内容>

1) 動画の場면을視聴し、その場面や対象児の心情をどのように感じ取りましたか？（自由記述）

2) あなたの幼少期はどのような「こども」でしたか？（自由記述）

| | | | |
|-------|---|-----|--------------------|
| ●協力園1 | 富山県内私立保育園 | 調査日 | 2022年10月11日 |
| | 5年1名、7年2名、12年1名、16年1名、20年2名、44年1名 | | |
| | 計8名 | | |
| ●協力園2 | 富山県内私立保育園 | 調査日 | 2022年10月11日 |
| | 2年1名、6年2名、7年1名、18年1名 | | |
| | 計5名 | | |
| ●協力園3 | 徳島県内私立保育園 | 調査日 | 2022年10月20日・10月21日 |
| | 1年1名、3年4名、5年1名、7年2名、12年2名、14年1名、15年1名、24年1名、30年1名 | | |
| | 計14名 | | |

表1 各研究協力園と研究協力者の経験年数

(2) インタビュー調査

質問紙調査の協力者27名を保育歴によりA群（5年未満）、B群（5年以上10年未満）、C群（10年以上20年未満）、D群（20年以上）に分け、偏りが出ないようバランスよく各群から2名ずつ選出する。また、質問紙調査の結果により①明らかな関連性が認められる②聞き取りによって関連が見出される可能性有り③今回の事例では関連性が認められない、に分類し偏りなく選出し、インタビュー調査から幼少期の経験と子ども理解の関連性について考察する。

6. 結果と考察

(1) 質問紙調査の結果

1) 回答の場面や心情の読み取り内容に関する結果

27名の調査協力者が同じ保育場面の動画を視聴した後、「その場面や対象児の心情をどのように感じ取りましたか？」という設問への回答(自由記述)の結果、65の読み取りの自由記述が抽出できた(表2)。

| 場面と心情の読み取り内容 | 数 |
|----------------------|----|
| 保育者との関わりを求めている場面 | 14 |
| 対象児の自己表出が困難な場面 | 11 |
| 友達との関係性の困難さが表れている場面 | 7 |
| 対象児が強い意志を示している場面 | 5 |
| 保育者の対象児への関わりを認めている場面 | 5 |
| 精神的な不安定さが表れた場面 | 3 |
| 対象児が自己表現できずにいる場面 | 3 |
| 対象児と保育者の信頼関係が見られる場面 | 2 |
| 対象児が抵抗している場面 | 2 |
| 対象児が寂しさを感じている場面 | 2 |
| 対象児が怒りの感情を抱いている場面 | 2 |
| 保護者と保育者の信頼関係が見られる場面 | 1 |
| 対象児の自信の無さが表れている場面 | 1 |
| お弁当の中身を嫌がっている場面 | 1 |
| 対象児が苛立ちを感じている場面 | 1 |
| 対象児が悲しさを感じている場面 | 1 |
| 対象児が反抗している場面 | 1 |
| 対象児がつらくしんどい場面 | 1 |
| 対象児のプライドが許さない場面 | 1 |
| 対象児が混乱している場面 | 1 |

表2 質問紙調査で抽出された読み取りと数

注) 一人の言語記録から複数の抽出有

2) 幼少期の経験との関連性に関する結果

質問紙調査の「あなたの幼少期はどのような「こども」でしたか？」の設問の自由記述の内容を読み、保育者の幼児期の経験と保育場面や心情の理解との関連性については、「明らかな関連性が認められる」は13名、「聞き取りによって関連が見出される可能性有り」は9名、「今回の事例では関連性が認められない」は5名であった（表3）。

| 保育者の幼児期の経験と保育場面や心情の理解との関連性について | |
|--------------------------------|-----|
| 明らかな関連性が認められる | 13名 |
| 聞き取りによって関連が見出される可能性有り | 9名 |
| 今回の事例では関連性が認められない | 5名 |

表3 幼少期の経験との関連性に関する結果

(2) 質問紙調査の考察

1) 回答の場面や心情の読み取り内容に関する考察

27名の調査協力者が同じ保育場面の動画を視聴した後に実施した、「動画で感じ取った場面や対象児の心情をどのように感じ取りましたか？」という質問紙調査の設問において65の読み取りが抽出できた。一人当たり平均して3～4通りの読み取りをしている。このことは、幼児教育・保育における保育者それぞれの子ども理解における「多様性」を裏付ける結果と捉えられるのではないか。

2) 幼少期の経験との関連性に関する考察

「あなたの幼少期はどのような「こども」でしたか？」という質問紙調査の設問の自由記述の内容から「聞き取りによって関連が見出される可能性有り」に分類された9名は、今回の保育場面が自分の経験と合致する要素が少なかっただけで、自分の経験を基盤にして読み取ろうとしていることが推察される共通点がある。自分の経験の中から、本研究の対象となる保育場面と類似した事柄を想起して、場面やその子の理解を図ろうとしているのではないだろうか。今後のインタビュー調査によってより深く聞き取ることの必要が強く感じられる。また、「今回の事例では関連性が認められない」5名については、他の場面の読み取りや、心情理解で対象となる保育場面と類似した事柄を想起して、場面やその子の

理解を図ろうと試みる可能性もあり、今後、異なる保育場面での調査をしたいと考える。

(3) インタビュー調査の結果

調査協力者1～4が勤務する協力園3は、12月後半よりコロナウイルス感染症が園内で流行し、予定していたインタビュー調査を延期することとなった。園長からの希望もあり、年明けの感染状況を見て実施することとし、調査協力1～3はZOOMで2023年1月25日に、調査協力者4は2023年1月30日に対面で実施した。調査協力者5～8は対面で2022年12月13日から12月23日に実施した。(インタビュー調査の詳細は資料参照)

(4) インタビュー調査の考察

この考察は、インタビューを担当した研究者1および研究者2が終了後に記録した資料を基に改めて考察としてまとめたものである。

1) 調査協力者1に関する考察

質問紙調査の記述内容から「1年目」に着目しインタビュー対象者とした。以前は看護師として病院勤めをしていた。その後、3人目のこどもを出産し育児休業中に、今後の子育てについて家族と相談し、看護師として協力園3に再就職し、保育歴が1年目となったことをインタビューの中で知ることとなった。前職の経験を踏まえた保育実践となっているが、看護や子育ての経験から質問紙調査の内容も、調査協力者1なりの養護と教育両面から子ども理解がなされていると考えられ、子どもの心情に寄り添った回答となっている。また、質問紙調査では幼少期の経験との関連について本人も「自分が経験したことも踏まえて、共感できるところがあるので、多少は影響していると思います。」と答えている。幼少期の自分が記憶している心情や小学生になって自己覚知していく段階で、周囲の友だちや大人との関係性が思い出され、今の自分の保育実践や子どもの心情理解に繋がっていると考えられる。

2) 調査協力者2に関する考察

時間制限のある中でのZOOMによるインタビューとなったため緊張のあまり言葉数が少なかったが、質問紙調査の回答は自分の考えが素直に表現できていると読み取れた。インタビューを進めるうちに、現在の協力園3は2か園目であり、以前の園では自分の居場所を見つけられず不安な日々を抱えながら5年間頑張ってきたが、自分で環境を変えることも必要と心機一転し、現在に至っていることを語ってくれた。また、この経験は自分にとって、子ども理解に対する穏やかさをもたらしてくれたと打ち明けてくれた。自分の幼少期とどこか似ている対象児の言動が自身の幼少期の経験と重なり、調査協力者の幼少期の振り返りに、「人見知りで恥ずかしがりだったので、なかなか友達の輪に入れなかった時は、(担任の先生が)仲立ちをしてくれ、優しくったと思います。」という記述があり、対象児の心情理解に大いに役立っていると推察できる。また、幼少期の自分の心情と対象児の心情が、どこか似ていることから、対象児の心情理解に共感できる部分が多く「影響している。」との回答内容であると考えられる。

3) 調査協力者3

保育歴24年、しかも、協力園3の開園時より保育を実践してきた経緯があり、保育者となった自分の保育の実績、今まで自分なりに確立してきた保育観が自身の幼少期の経験以上に役立っていると自負してのインタビューとなった。幼少期は食への興味より友達と遊ぶ方が楽しいとの思いがあり、対象児の食べないという姿を自分の「食べない」とは違った見方で捉えていると考えられる。インタビュー調査において「幼少期はあまり記憶にない。」と述べており、質問紙調査でも幼少期の経験との関連性は「どちらともいえない」を選択している。物静かで穏やかな印象で、インタビューでも言葉を選びながら丁寧に受け答えする姿勢は、保育歴24年の経験を物語っていると思われた。長年のキャリアと中堅保育士としての自信とやりがいが出唆される質問紙調査の回答やインタビュー内容であった。

4) 調査協力者4

質問紙調査では「幼少期の記憶がほとんどなく覚えていない。」と回答しているが、インタビューを進めていくうちに、周囲の大人から大切に育てられ、自己中心的言動であっても、周囲が認めてくれていたという幼少期の経験を振り返ることとなった。保育歴14年目であるが挫折を経験し、園長に説得され協力園3の開園時に移り仕事をする事になって6年目となる。長年保育をしてきた先輩保育者と、園にとって初めての5歳児25名を卒園させたという経験が自信につながった。また、その後子育てを経験し、子ども理解という観点が大きく変わったと実感している。幼少期の経験は「影響していない。」との質問紙調査の回答であった。しかし、インタビューをしていくうちに、自分の幼少期の経験が大いに影響しており、仕事のやりがいや実践者としての大きな自信となっているとインタビュー終了後に調査協力者が幼少期の経験との関連性を自覚した一例となった。

5) 調査協力者5

保育歴2年目で自分が憧れていた保育者になり、質問紙調査など意欲的に参加しようとする姿があり、回答も詳細に書いている。しかし、心情まで読み取る力は途上のであり、対象児のことを考えているつもりであるが、相手の気持ちに寄り添うまでの心情に届かず、映像を見た表面的な捉え方や、自分に置き換える読み取り方が優先している。自分の幼少期に食べるのが遅かったことを意識し、対象児が食べなかったことを弁当の中身が自分の嫌いなものであったために食べたくないと捉えていた。

幼少期の経験と対象児の心情を読み取る際の影響については、どちらとも言えないと捉えている。対象児はお弁当の中身が嫌いなもの苦手なものが入っていたために食べたくないと読み取っているが、自分の場合は食べたくないわけではなく、食べるのが遅かっただけであると振り返っている。食事に関して幼少期の経験から対象児も少し似ている部分があるとの考えをもっている。

6) 調査協力者6

18年の保育歴が、子どもにやさしく寄り添う気持ちの強さにつながっている。子どもへの関わりや保護者への対応の際に相手の気持ちになって接する姿勢は、保育経験を積み、得られた成果であり、今の保育者としての在り方につながっているのではないかと。担任保育者の対象児に対する関わりを素敵だと捉えているが、反面、対象児に寄り添う方法を自分なりに探り、対象児のどうしようもない気持ちを理解しようとしている。自分の幼少期の経験は「影響していない」と回答していたが、インタビューが進むにつれ幼少期の自分の姿を話すうちに、うまく自分の気持ちをコントロールできない、気持ちを伝えられないなどの共通点に気付くこととなった。自分の幼少期を改めて振り返ることから、自分では意識していなかった幼少期の経験が影響しているという結果に驚きを隠せない姿があった。

7) 調査協力者7

幼少期から周りの空気や大人の目を気にして良い子として行動することにより、周囲に波風を立てずに生活してきた自分の育ちを振り返ることとなった。自分ではどうしようもない心の内を吐露しつつ、対象児の心の叫びを汲み取り、言葉にできない対象児の姿にもどかしさを強く持っているように見て取れた。家庭環境の中で唯一自分の気持ちに正直になれた楽しい思い出を鮮明に記憶し、心のよりどころとしている。現在も周りに気遣い、自分の思いを抑えて生活しており、捌け口がないままの良い人であることの辛さを引きずっている。

自分にはできなかった対象児が反発した言動で表現している姿を「偉い」「なかなか根性ある」などの言葉で称賛し認めている。対象児の成長に願いを込めた担任保育者の対応とその方向性に理解を示しながらも、対象児の心情に寄り添った関わりの必要性を語っている。

幼少期の経験が子ども理解に関連性があるかに対しては「成長の中で変わって行く」と答え、認めることは自分の確立した地位を揺るがすことにつながる不安からか、頑として認めなかった。しかし、実は幼少期の経験は子どもの心情理解に大いに関連していると自分自身が一番分かっているとも捉

えられる結果となったのではないだろうか。

8) 調査協力者 8

対象児の言動から本当の気持ちに気づき、自分が関わるときにはこうしてあげたいという思いを強めている。対象児と保育者の信頼関係の構築が見られることを踏まえ、担任保育者が対象児の成長を願う対応だが気持ちは通じていない現状にもどかしさを感じている。それは、幼少期に自分の気持ちに寄り添ってくれた保育者の存在が大きく、今の保育者としての自身のあり方を導いていると捉えていることが感じ取れた。子どもの話をしている笑顔の表情からは、本当にかわいいという気持ちが伝わり、それが対象児のどうにも理解してもらえない葛藤を歯がゆい思いで受け止めているように感じた。調査協力者 8 は、幼少期の経験が子どもの心情理解に大きく関連している。

7. 総合考察

(1) 仮説：「子ども理解に保育者の幼少期の経験が影響を及ぼす」の検証

本研究は、保育場面の読み取りや幼児の心情理解に見られる「多様性」の要因に焦点を当て、保育場面の読み取りと幼児の心情理解をする際の多様な捉え方の根底に保育者の幼少期の経験が存在し、影響を及ぼすという仮説の検証に取り組んだ。その結果、記憶の有無にかかわらず、幼少期の経験は少なからず保育場面の読み取りと幼児の心情理解に影響を及ぼすことが示唆される結果となった。保育場面の読み取りと幼児の心情理解をする際に幼少期の経験が影響を及ぼすという仮説が検証された結果と言える。子どもとしての自分、保育者としての自分、大人としての自分を理解することが保育場面の読み取りと幼児の心情理解をする際に保育者の幼少期の経験はプラスに作用するのではないだろうか。

(2) 子ども理解に保育者の幼少期の経験が及ぼす影響の自覚の有無について

記憶の有無は幼少期の経験が影響するか否かの自覚の有無と関連するものと考えられる。インタビュー調査を実施する際には、事前に実施した質問紙調査の回答内容から、聞き手は関連性の自覚の有無を予測していたが、どのような問いかけが本人の気づきに繋がるのか難しさを感じていた。しかし、インタビューが進む

につれ、保育者の幼少期の経験と子どもの心情理解につながる糸口が見つかり、聞き手の問いかけに対し、改めて冷静に考えることで意識していなかった対象児との関連性を発見し、幼少期の経験が影響していると自覚し驚愕する姿が見られた。このことから、保育者一人一人の子どもの見方、子どもの心情理解の原点は、それぞれの保育者の幼少期の経験が影響しているという研究成果と語るのではないだろうか。

本研究においては。保育歴の長い保育者の方が保育歴の短い保育者よりも無自覚に近いことも分かった。このことは、保育歴が短く保育経験が浅い保育者には、その場面やその子の心情を理解するために必要な知識や経験から導き出される情報も少なく、自己の幼少期の経験を引き出し、保育場面の読み取りや幼児の心情理解をするための判断材料として活用していることが推察される。一方で、保育歴が長く保育経験が豊富な保育者は、その場面やその子の心情を理解するために必要な知識や経験から導き出される情報が多く、特にこれまでの保育実践における経験を判断材料として活用していることが推察された。幼少期の経験を判断材料として活用する頻度が自覚の有無と関連すると考える。

(3) 「多様性」の要因についての考察

本研究において仮説が検証できたことはすでに述べた通りである。しかし、この結果は、保育者一人一人の子ども観・保育観に与える影響と捉えるべきではないかという新たな考えに至った。幼少期の経験が保育歴の短い保育者の子ども観・保育観の形成に影響を及ぼし、保育歴を重ねることにより経験から導き出されたその保育者の子ども観・保育観の確立につながり、保育場面の読み取りや幼児の心情理解に見られる「多様性」の要因になると言えるのではないだろうか。

8. おわりに

インタビュー調査終了後に「こんな方法で、子どもに目を向けることも、また、自身の保育の質的向上に繋がると感じました。」という感想が聞かれた。保育場面の読み取りや乳幼児の心情理解の力量形成は、保育者としてのキャリアと同時にスタートすると捉えがちであるが、子ども観・保育観の根底にあるものを自己認識することにより、保育場面の読み取りや幼児の心情理解の力量形成に組

織的に取り組む必要性を感じる研究活動となった。引き続き、保育場面の読み取りと幼児の心情理解に関する「多様性」に焦点を当てて、さらに様々な角度から研究を進めていきたい。また、今後は乳幼児の「しあわせのカタチ」にとどまらず、保育者が生き生きと保育をするための研修のあり方を追究することにも視野を広げ、保育者の「しあわせのカタチ」を実現する研究に取り組みたい。

謝辞

本論文は 2022 年度しあわせ研究費（研究テーマ：子ども理解に保育者の幼少期の経験が及ぼす影響に関する一考察）の助成を受けたものです。調査にご協力いただきました 3 園 27 名の保育士の皆様に感謝申し上げます。

引用文献

- 1 ジェームズ・J・ヘックマン（2015）『幼児教育の経済学』東洋経済新報社 p29・p33
- 2・3 Rachel Carson（1996）『センス・オブ・ワンダー』新潮社 pp23～24
- 4・6 中坪史典編著（2018）『質的アプローチが拓く「協働型」園内研修をデザインする 保育者が育ちあうツールとしての KJ 法と TEM』ミネルヴァ書房 pp28-31・pp25-28
- 5 マシュー・サイド（2021）『多様性の科学』（株）ディスカバー・トゥエンティワン p314
- 7 エイミー・C・エドモンドソン（2021）『恐れのない組織 「心理的安全性」が学習・イノベーション・成長をもたらす』英治出版株式会社

参考文献

- 前野隆司・前野マドカ（2022）『ウェルビーイング』（株）日経 BP 日本経済新聞出版
- 遠藤利彦（2019）「これから求められる非認知能力とは？アタッチメント：「非認知」的な心の発達を支え促すもの」『公益財団法人日本教材文化研究財団 令和元年度研究紀要』第 49 号特集 I
- 樋口耕一他（2022）『KH Coder OFFICIAL BOOK II 動かして学ぶ！ はじめてのテキストマイニングフリー・ソフトウェアを用いた自由記述の計量テキ

【総説】

子ども理解に保育者の幼少期の経験が及ぼす影響に関する一考察
－保育場面の読み取りと幼児の心情理解の分析から－

スト分析一』ナカニシヤ出版

ダニエル・ゴールマン（1998）『EQ—こころの知能指数』講談社